

〔研究ノート〕

## 社会主義独裁体制と贈与交換

黒 坂 真

### 要旨

社会主義独裁体制では人民は独裁者を「諸国民の父」「世界革命運動の領袖」「民族の太陽」「絶世の偉人」などと礼賛せねばならなかった。独裁者は人民に崇拜の代償として高級物資や高い賃金を与えてきた。本論はこの史実を贈与交換とみなす。分析の結果、弱い社会主義独裁体制で均衡の財生産労働は、独裁者の最低消費要求水準、労働総量、独裁者が消費を好む程度に関して増加関数であることがわかった。また均衡の財生産労働は、財の生産性と生産における独裁者への分配率に関して減少関数であることがわかった。弱い社会主義独裁体制は、人民の崇拜労働嫌悪度がある水準より小さくなければ存続できない。独裁者は人民の崇拜労働嫌悪度を低くするために外部情報の流入を防ぐのである。

キーワード：社会主義独裁体制 贈与交換 崇拜労働 ワルラス法則

### 1. はじめに

本論は、独裁者崇拜を独裁者と人民の間の贈与交換と把握して、社会主義独裁体制の資源配分上の効率性と体制の存続について分析する。社会主義独裁体制では人民は独裁者を「諸国民の父」「世界革命運動の領袖」「民族の太陽」「絶世の偉人」などと礼賛せねばならなかった。独裁者は人民による礼賛と崇拜により効用を得る。人民は独裁者崇拜により苦痛、負の効用を得るが代償として独裁者から物資や賃金を受け取る。本論はこれらを贈与交換と把握する。黒坂（2008）（2013）では、独裁者は人民の所得を一定水準に抑えることができると想定していた。本論は弱い社会主義独裁体制を想定し、独裁者が人民を自らの支配下で労働をさせることはできるが人民の所得を一定水準以下に抑えることができなくなっていると想定する。

我々が想定する社会主義独裁体制では、実質賃金や生産量が変動して財市場や労働市場の需給を一致させるのではない。我々は独裁者と人民の間の贈与交換、部分ゲーム完全均衡により崇拜労働に対する実質賃金が決まり、その実質賃金により労働市場と財市場の需給が一致するように調整がなされるとみなす。我々は、弱い社会主義独裁体制では市場経済が部分的にしか浸透しておらず、人々が財を所属企業からの分け前と独裁者との贈与交換により得ていると考える。以下、2でモデルの背景となっている社会に対する認識手法と、独裁体制の現実について述べる。3で本論のモデルを提示して分析を行う。4でモデル分析により得られた結論を要約し、今後の課題を述べる。

## 2. 社会認識の手法と独裁体制の現実

独裁体制は社会制度の一つである。経済理論では多くの場合、政治、社会制度は与件とされてきたが、政治学や社会学、歴史学の諸成果から着想を得て政治、社会制度を経済理論に導入する例が増加している。Acemoglu and Robinson (2006) は独裁体制と民主主義体制の成立、独裁体制に対する革命（蜂起）とそれを防ぐための再分配策などを検討している。政治学や社会学、歴史学の諸成果から学んで経済理論にそれらを導入するとき、我々はどんな手法に依拠すべきなのだろうか。以下、独裁体制について経済理論の手法による分析と社会認識の手法の関連について説明する。

人は言葉により周囲と世界を解釈し、その中での自分の位置や役割を見出す。人は自らが解釈した世界での自分の役割を演じることによって安心感と満足を得る。役割を演じることは労働を提供することでもある。労働提供の代価として人は他人から財やサービス、貨幣を得る。人は貨幣により財やサービスを得てそれらを消費し、生活を続ける。何かの要因により、人が世界を異なるように把握し意味解釈を変更すれば、それまでの自分の役割を不適切とみなして行動を変えていく。意味解釈の変更が経済に与える影響を考えてみよう。自分の役割が不適切だったと把握すれば、労働意欲が減退し生産性は低下するかもしれない。それまでの自分の消費行動が不適切とみなすようになれば、消費の形態、財への需要が変化する。人々の定型化された行動を制度と考えるのなら、制度の基礎となっているのは人々の心中にある世界と自らの役割に関する意味解釈である。井筒俊彦（1990）はイスラムの生誕を意味論的解釈学により描いた。井筒俊彦（2013, p 39）によれば、書かれた言葉としての「コーラン」は、神が預言者に直接語りかけたという具体的な言語行為の場とはまるで違った別の場で展開している。元の発話状況から切り離されているので、誰でもそれを自由に解釈できる。イスラム文化は「コーラン」に依拠してきたが、「コーラン」を自由に解釈しそれを積み重ねることによって成長してきた。盛山（2011, p 23）によれば、人は誰でも世界がどうなっているのか、なぜ世界がこのようになっているのか、何に価値があるのか、どう生き行為すべきなのかなどを問いかけ、部分的に答えを見出しながら生きている。そうした問いと答えから成っているのが意味世界である。盛山（2011, p 23-24）によれば、意味世界は想像の世界であり、社会的世界に存在する物事は、意味に支えられて存在する。我々は、井筒や盛山（2011）の視点が、独裁体制を解釈し分析するためにも有効であると考え。独裁者と人民の関係を、人民が頻繁に用いている賛辞を解釈することにより把握するという手法は、井筒や盛山（2011）の解く意味世界論と共通している。人々が心中に描いている意味世界を経済理論でモデル化していくことにより、その意味世界が資源配分とどのように影響しているかを分析できる。様々なモデル化を通して、我々による世界の解釈が豊富になる。

社会主義独裁体制で人民は、独裁者を「諸国民の父」「世界革命運動の領袖」「民族の太陽」「絶世の偉人」などと礼賛せねばならなかった。独裁者は自らを礼賛する人民に対し何らかの報酬を与える。人民はその報酬を期待して独裁者礼賛を続ける。独裁者が人民に

強制する礼賛には、独裁者が与える報酬こそ最高水準であるという言説が含まれている場合がある。これを人民が認めれば、独裁者への崇拝が大きな苦痛でなくなり、独裁体制が存続しやすくなる。独裁者が外部情報の流入を禁じ人民に自らへの崇拝を強制してきた背景には、自らへの崇拝嫌悪度を低くして体制を存続させる狙いがあったのだろう。

贈与交換を経済理論で分析した業績には次がある。Akerlof (1982) は、労働者が市場での均衡水準より高い賃金を支払われているとき労働努力の水準を標準より高くしていることを贈与交換とみなすモデルを提示した。Kranton (1996, p 831) によれば、多くの人々が互酬交換に従事しているときには市場の規模が小さいから市場で交易相手を見つけることが難しい。当初多くの人々が互酬関係にあるなら、市場は十分に機能しない。多くの人々が互酬関係に従事し続けるので、互酬関係からの利得が増えていく。1930年代のソ連のデータを調べた Lazarev and Gregory (2003) によれば、独裁者は人民の忠誠心を得るために、市場での取引でなく贈与交換を重視した。しかし贈与交換は非効率的資源配分であるから長期には独裁者の権力基盤を蝕んだ。

北朝鮮における独裁者と人民の関係は贈与交換の典型的な例である。北朝鮮社会の実情については、財団法人韓国軍事問題研究院 (2013) が詳しいので、以下これに依拠して説明する。北朝鮮の全ての政治組織は労働党を中心に行っている政治共同体である。この政治共同体の目的は首領の思想を中心にした党の唯一思想体系と唯一的指導体系の構築である。唯一思想体系とは首領の思想で全社会を一色化し首領の命令と指示により全社会を一つのようにして動かすことである (同書 p 257)。同書 (2013, p 262-263) は北朝鮮の住民の日々の生活について次のように説明している。北朝鮮の全ての住民は各自が所属している団体別に政治学習、生活総和、技術会議など休む暇もなく各種の集まりに悩まされる。生活総和とは、各住民が所属する組織 (労働党、少年団、青年・職業・女性・農民同盟) で1週間に1度、反省の時間を持つ制度であり、そこでは自分および相互を批判する決戦場でもある。全ての機関は日課の始まる30分前に労働新聞の社説、論評の読み合わせ会を行う。水曜学習、金曜講演、土曜生活総和がある。常に降りてくる党の特別指示がある。北朝鮮の統治構造で住民生活の中に実際の血管のように組み込まれている末端組織は「人民班」である。通常、30-40家族で1つの人民班が構成される。人民班長は有給公務員である。班長は外部から来た見知らぬ人間を徹底的に調べる。同書 (2013, p 275-277) は、忠誠心への報酬を次のように説明している。北朝鮮では、人間の価値は金日成、金正日に対する忠誠心を尺度に評価される。社会成分という首領に対する忠誠心で人を区別する制度がある。これにより全ての人間を等級で区分し、労働党が与える全ての配給に差が生じる。北朝鮮には、首領の名で渡される労働党の贈り物がある。金正日の贈り物政治は良く知られている。金正日は1月1日、自分の誕生日 (2月16日)、父親の誕生日 (4月15日)、国慶節 (9月9日)、労働党創建記念日 (10月10日) など五大国家祭日には必ず贈り物を出した。幹部たちはみな、金正日の贈り物を受け取ろうと必死に努力する。贈り物を受け取ったものは大きな過ちがない限り、生涯特別待遇を受ける。首領の贈り物受領対象は抗日パルチザンの家族、革命烈士の遺家族、朝鮮戦争参戦功労者などである。彼らには日常

生活必需品も長期的に供給される。それを受け取るたびに彼らは講演会で「将軍様の特別な愛情で下さった配慮」であると何度も演説をする。贈り物は深夜、護衛総局の要員が専用冷凍車に積み、各機関、各家庭を訪問し受領者に非公開で証書とともに授与する。このとき受領者は式場や家庭にかけられている金日成、金正日の肖像画に向かって挨拶と挙手敬礼をし、次のように力強く叫ぶ。「偉大なる領導者金正日将軍様の政治的信任と配慮に対し忠誠でお答えします」。首領への忠誠心に対し、感謝の手紙と表彰、昇進という報酬もある。首領に接見できれば身分が変わる。その身分により乗用車や豪華住宅などを受け取ることができる。

このように北朝鮮では独裁者からの贈り物と引き換えに、人民は独裁者に忠誠を誓い労働をする。これはまさに贈与交換である。次に、モデルを提示する。

### 3. モデル

独裁者と人民から成る経済を考える。人民は  $n$  人いるが、等質的なので一般性を失うことなく 1 人と想定できる。人民の労働総量を  $\bar{L}$  とする。人民は財の生産労働  $L$  と、独裁者への崇拜労働  $\bar{L}-L$  を行う。生産関数を次のようにコブ・ダグラス型とする。 $A$  は財の生産性を表す。

$$X = AL^\gamma \quad 0 < \gamma < 1 \quad A > 0 \quad (1)$$

生産された財のうち、 $\alpha$  を人民、残りの  $1-\alpha$  を独裁者が受け取る。独裁者は人民の行う崇拜労働 1 単位に対し、実質賃金  $w$  を支払う。人民の所得は次になる。

$$Y = (1-\alpha)X + w(\bar{L}-L) \quad (2)$$

人民は所得をすべて消費する。人民は崇拜労働を行うと不効用を得る。人民の効用関数を次のように対数型とする<sup>1)</sup>。

$$U^p = a \ln \{ (1-\alpha)X + w(\bar{L}-L) \} - b \ln(\bar{L}-L) \quad a > b > 0 \quad (3)$$

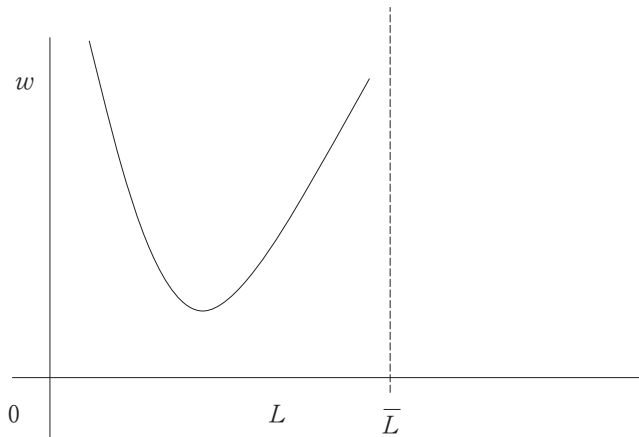
人民は効用を最大化するように労働配分を決定する。 $a$  は、人民の消費に対する選好度を表す外生変数である。 $b$  は、人民の崇拜労働嫌悪度を表す外生変数である。整理すると、人民の効用最大化条件は次になる。

$$w = \frac{(1-\alpha)A}{a-b} \left( a\gamma L^{\gamma-1} + \frac{bL^\gamma}{\bar{L}-L} \right) \quad (4)$$

(4)式は、人民の財生産労働と崇拜労働実質賃金の関係を表している。実質賃金と財生産労働の関係は図1のようになる。我々は弱い社会主義独裁体制を想定しているので、黒坂(2008)(2013)と異なり、人民の参加制約を考慮していない。弱い社会主義独裁体制では独裁者には人民の所得をある水準以下に抑え込む権力がない。人民は独裁者の下で働き報酬を得ているが、労働配分については自分で決定できる。独裁者の消費  $C$  は所得から人民への崇拜労働賃金支払を差し引いた残りである。

1) 人民が崇拜労働から不効用を得て、効用を最大化するように労働配分を決定するという点はこれまでの拙稿と異なっている。

図1 崇拜労働実質賃金と財生産労働



$$C = aX - w(\bar{L} - L) \tag{5}$$

独裁者は財の消費と、人民が行う崇拜労働から効用を得る。独裁者には、独裁者としての威厳を保つための最低消費要求水準  $C^M$  が存在すると想定する。独裁者は、(4)で表される人民の効用最大化行動を考慮して、効用を最大にするように崇拜労働実質賃金を提示する。崇拜労働に対する実質賃金とは、独裁者と人民の間で行われる贈与交換の報酬である。(5)に(1)(4)を代入すると、独裁者消費は次になる。

$$C = \left\{ \alpha + (1-\alpha) \frac{a\gamma - b}{a-b} \right\} AL^\gamma - \frac{1-\alpha}{a-b} Aa\gamma L^{\gamma-1} \tag{6}$$

独裁者消費が正の値をとるためには、人民が崇拜労働嫌悪度を表す外生変数  $b$  が次の範囲でなければならない。

$$\alpha a > b \tag{7}$$

人民の崇拜労働嫌悪度は、何らかの原因で外部情報が流入すれば上昇するであろう。外部情報の流入により人民は独裁者、宣伝機関が提示している世界や、あるべき人間像と異なる世界観、異なる人間観が存在することに気付く。人は自分の生き方に関して新たな意味を見いだせば、それまでの自分の生き方を見直すようになる。独裁者が外部の流入を防ぐのは体制存続のためなのである。独裁者の効用関数を次のような対数型とする。 $C^M$  は独裁者の最低消費要求水準である。

$$U^D = \beta \ln(C - C^M) + (1-\beta) \ln(\bar{L} - L) \quad 0 < \beta < 1 \tag{8}$$

独裁者は、(4)で表される人民の効用最大化行動を考慮して、効用を最大にするように崇拜労働実質賃金を提示する。(6)を(8)に代入すると次を得る。

$$U^D = \beta \ln \left[ \left\{ \alpha + (1-\alpha) \frac{a\gamma - b}{a-b} \right\} AL^\gamma - \frac{1-\alpha}{a-b} Aa\gamma L^{\gamma-1} - C^M \right] + (1-\beta) \ln(\bar{L} - L) \tag{9}$$

独裁者は効用を最大にするように崇拜労働実質賃金を決めるが、崇拜労働実質賃金は(4)

より財生産労働の関数である。そこで、(9)を財生産労働で偏微分してゼロとおけば、効用を最大にする財生産労働を得られる。均衡の崇拝労働実質賃金は均衡財生産労働を(4)に代入して得られる。我々のゲームの構造は次のようになっている。初めに独裁者が人民に崇拝労働実質賃金を提示する。人民はこれを見て労働配分を決める。このゲームを後ろ向きに解くことにより、部分ゲーム完全均衡を導く。計算結果を整理すると、次を得る。

$$\gamma A \frac{\{\alpha a - b + a\gamma(1-\alpha)\}L + (1-\gamma)(1-\alpha)a\bar{L}}{(\alpha a - b)AL^2 - a\gamma(1-\alpha)AL(\bar{L}-L) - (a-b)C^M L^{2-\gamma}} = \frac{1-\beta}{\bar{L}-L} \quad (10)$$

(10)の左辺は、財の生産に労働を1単位配分したときに独裁者が財消費から得る限界効用である。右辺は独裁者崇拝に労働を1単位配分したときに独裁者が得る限界効用である。効率的な労働配分のためには、均衡でこれらが一致していなければならない。以下、効用最大化のための二階条件が満たされていると仮定する。

他の条件を一定にして財の生産性が上昇したとしよう。財消費から得られる限界効用が減少するので、独裁者は財の消費を減らして限界効用を均等化させようとする。このためには財生産労働を減らさねばならない。他の外生変数に関しても同様に解釈できる。

我々の想定する独裁体制では財の生産量や雇用量、実質賃金はこのように独裁者と人民の間の贈与交換、部分ゲーム完全均衡の解として定まる。独裁者と人民それぞれの予算制約式を総計すると次が成立する。ゲームの均衡では、労働市場の需給一致が得られているから、下記のワルラス法則より均衡では財市場の需給も一致している。我々は投資を無視しているので、財への需要は消費需要のみである。

(独裁者の消費需要 + 人民の消費需要 - 財生産量)

$$+ (\text{財の生産のための労働需要} + \text{崇拝労働への需要} - \text{労働供給}) = 0 \quad (11)$$

本論が想定している独裁体制は独裁者が人民を酷使して資産をため込み、貯蓄から投資に配分するという経路を無視している。独裁者の貯蓄・資産選択行動を考慮すると、金融資産市場の需給一致式が含まれることになる。金融資産市場の需給一致式で均衡の金利が決定されることになるが、その分析は別の機会に行いたい。主な外生変数が均衡の財生産労働に与える効果は表1である。

表1 主な外生変数の変化が均衡の財生産労働に与える影響

	$A$	$C^M$	$\beta$	$\bar{L}$	$\alpha$	$a$	$b$
$L^*$	-	+	+	+	-	±	±

我々は命題1を得る。

### 命題1

独裁者が人民に崇拝労働をやらせているが人民の所得をある水準以下に抑え込めない弱い社会主義独裁体制を考える。均衡の財生産労働は、独裁者の最低消費要求水準、労働総量、独裁者が消費を好む程度に関して増加関数である。均衡の財生産労働は、財の生産性

と生産における独裁者への分配率に関して減少関数である。人民の消費選好度、崇拝労働嫌悪度に関しては両義的である。

弱い社会主義独裁体制では、財の生産性が上昇すると独裁者が財生産労働を減らし、人民との贈与交換である崇拝労働を増加させてしまうことがわかった。また弱い社会主義独裁体制では、人民の崇拝労働嫌悪度が何らかの理由により十分に上昇すると独裁者の消費が許容範囲を超えてしまい、体制の存続が困難になることもわかった。均衡の財生産労働がこのように決まると、弱い社会主義独裁体制における崇拝労働実質賃金は(4)により決まる。社会主義独裁体制における社会厚生とはどのように考えるべきだろうか。本論のモデルでは、独裁者が人民の行う崇拝労働により効用を得ているが人民は崇拝労働から苦痛、負の効用を得ている。通常の市場経済を分析する際には社会厚生は人々が財の消費より得る効用の和とみなされているので、比較のために崇拝労働からの効用、不効用を無視して社会厚生を考えよう。財の消費量は生産量と等しいから、財の生産量を社会厚生  $SW$  と考える。財の生産は(1)により決まるので、社会厚生は均衡の財生産労働と財の生産性に依存している。主な外生変数が社会厚生  $SW$  に与える影響は次になる。

表2 主な外生変数の変化が社会厚生に与える影響

	$A$	$C^M$	$\beta$	$\bar{L}$	$\alpha$	$a$	$b$
$SW$	±	+	+	+	-	±	±

我々は命題2を得る。

### 命題2

独裁者が人民に崇拝労働をやらせているが人民の所得をある水準以下に抑え込めない弱い社会主義独裁体制を考える。社会厚生は、独裁者の最低消費要求水準、労働総量、独裁者が消費を好む程度に関して増加関数である。均衡の財生産労働は、生産における独裁者への分配率に関して減少関数である。財の生産性、人民の消費選好度、崇拝労働嫌悪度に関しては両義的である。

通常の市場経済であれば、財の生産性向上は社会厚生を増大させると考えられるが、独裁体制では財の生産性向上により財生産労働が減少する。これにより、財の生産性向上が社会厚生に与える効果は両義的になる。人民が労働の一部を独裁者の満足に配分する社会主義独裁体制は本質的に非効率的なのである。

## 4. まとめと今後の課題

本論は、独裁者崇拝を独裁者と人民の間の贈与交換と把握し、弱い社会主義独裁体制の資源配分上の効率性と体制の存続について分析した。独裁者が人民の行う独裁者崇拝に対

する対価として実質賃金を与えるという本論の設定は、北朝鮮の現実と整合的である。分析により、弱い社会主義独裁体制で均衡の財生産労働は、独裁者の最低消費要求水準、労働総量、独裁者が消費を好む程度に関して増加関数であることがわかった。また均衡の財生産労働は、財の生産性と生産における独裁者への分配率に関して減少関数であることがわかった。弱い社会主義独裁体制では、人民の崇拜労働嫌悪度が何らかの理由により十分に上昇すると体制の存続が困難になる。外部情報が流入すれば人民は独裁者が普及している世界と異なる世界、異なる生き方が存在することに気づき、独裁者への崇拜労働を嫌がるようになる。社会主義独裁体制存続のためには外部情報の流入を防ぎ、人民の崇拜労働嫌悪度の上昇を防がねばならない。通常の世界経済であれば、財の生産性向上は社会厚生を増大させると考えられるが、弱い社会主義独裁体制では財の生産性向上により財生産労働が減少する。これにより、財の生産性向上が社会厚生に与える効果は両義的になる。これは、社会主義独裁体制の本質的な非効率性を示している。本論は独裁者の貯蓄・資産選択行動を考慮していない。この件については別の機会に行いたい。

#### References

- (1) Acemoglu, D. and James A. Robinson (2006) *Economic Origins of Dictatorship and Democracy*, New York, Cambridge University Press
- (2) Akerlof, G. A. (1982) "Labor Contracts as Partial Gift Exchange", *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 97, No. 4 November, pp. 543-569
- (3) Kranton, R. E. (1996) "Reciprocal Exchange; A Self-Sustaining System", *The American Economic Review*, Vol. 86, No. 4, September, pp. 830-850
- (4) Lazarev, V. and Paul Gregory (2003) "Commissars and cars: A case study in the political economy of dictatorship", *Journal of Comparative Economics*, Vol. 31, pp. 1-19

#### 日本語参考文献

- (1) 井筒俊彦 (1990) 「イスラーム生誕」 中公文庫
- (2) 井筒俊彦 (2013) 「『コーラン』を読む」 岩波書店
- (3) 黒坂真 (2008) 「独裁体制の経済理論」 八千代出版
- (4) 黒坂真 (2013) 「社会主義独裁体制と世界革命路線」 大阪経大論集第64巻第4号, pp. 139-147
- (5) 盛山和夫 (2011) 「社会学とは何か 意味世界への探求」 ミネルヴァ書房

#### 韓国語参考文献

- (1) (재) 한국군사문제연구원 (2013) "북한군의 불편한 진실 탈북 군인들의 이야기" (財団法人韓国軍事問題研究院「北韓軍の不便な真実 脱北軍人たちの話」)